

教宣 せぶん

墓穴を掘る？！

昨日の長野支店への要請行動で、伏し目がちに、後ろに居並ぶ社員に対して、他労組の方が「いまは外勤社員の問題だけど、いずれ自分たちの問題になるんだぞ。わかっているのか」という言葉を投げ掛けました。この種の問題をいくつも見てきた、客観的にもものが見える立場の方には、これから起こる「未来」が、容易に想像つくのでしよう。

会社は、中核代理店構想と称して、代理店を統合させようとしています。低挙績の、未成熟な代理店を淘汰しようとしています。抜本改革と称して業務のプロセスを大幅に簡素化させようとしています。それらの施策によって、社内はどうなるのでしょうか。代理店営業の社員はいまほど必要なくなります。内務の女性社員の仕事もなくなり、派遣社員でまかなえることになるでしょう。会社から見れば大幅な人件費削減が可能となるわけです。もっと言えば、その際に雇用を破壊されるのは、旧Tでしょうか？旧Nでしょうか？合併以来の新企業が歩んできた足跡を見れば、その答えは容易に出るはずです。

もし、私たちが提訴せずに、全員、会社の思惑通りに身を処していたとしたら人事企画部に日勤社出身者がいたでしょうか？皮肉な話しですが、私たちの存在と人事企画部の日勤出身者は「運命」共同体のように私には見えます。

東京海上との企業合併が決まった際に、やはり歴史を知る方々、ものごとの全体像・本質を知る方々、すなわち全損保本部は、この企業合併によって、小さい企業の従業員がどうなっていくのか、予測していました。損保ジャパン社の場合も同じです。予測だけではなく、だからいまでできることがあると説いていました。残念ながらその予測は、的中してしまいました。その予測で言えば、私たち契約係従業員の次は日勤出身の内勤社員が攻撃的になります。いまの情勢からすれば、それは容易に想像がつかます。役員を追放し、契約係を代理店に放逐し、内勤社員のクビを切り、日勤色を一掃すれば、この合併新企業は、やすやすと日勤社が有していた資産、収保、顧客を手に入れることができます。社名から日勤の文字がなくなるかもしれません。表で言っていることと、裏でやっていることが「まったく違う」ことを、私たちはこの新企業になって嫌というほど知りました。

「全損保にいたら合併新企業では残れない」と言っていた人たちと「全損保にいないければ合併新企業では残れない」と言っていた人たち、どちらが正しかったのでしょうか？「墓穴を掘っていることはわかっているけどいまのポジションではどうしようもない」と思っている人でも、いまでできることは必ずあるはずです。